

Nara Women's University

内モンゴルにおけるモンゴル族の伝統的オボー祭祀
の研究：
ウランチャヴ地方の旗・オボー祭祀の復活と変容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学大学院人間文化研究科 公開日: 2011-09-28 キーワード (Ja): モンゴル族, 旗・オボー祭祀, 伝統儀礼, 内モンゴル, 民族アイデンティティ キーワード (En): 作成者: アルブタン,ダゴラ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2805

内モンゴルにおけるモンゴル族の伝統的オボー祭祀の研究

— ウラーンチャヴ地方の旗・オボー祭祀の復活と変容 —

アルブタン・ダゴラ*

1 研究背景

1970年代の末から始まった中国の「改革開放」と「中国特色ある社会主義の建設」による市場経済へのシフトは、基本的に「経済」を主題にした国家建設すると同時に、思想解放、伝統文化の重視と復活、宗教信仰の自由や少数民族へのいろいろな優遇政策を打ち出した。このような、国家の政治、経済システムの社会変動によって、内モンゴル自治区（以下内モンゴル）の牧畜地を中心に、モンゴル人のコスモロジーを反映し、伝統的な祭祀生活の中心である「オボー祭祀」が復活した。

オボー（obu γ -a）祭祀とは、石、木、ボルガス（細柳）、芝生、土、煉瓦と雪を積み上げて堆を造り、天、地、龍地方の神々などを信仰し祭る習俗である。また、オボーはモンゴル人が太古の昔から伝えてきた方向、山と川に分岐、溝谷、峻険の標である。そして、モンゴル人が伝統的に天、地、龍、神々などを祭る祭壇でもある。（賽音吉日嘎拉 1996 P:966）

現在の内モンゴルのモンゴル族の殆どが52の旗（ホシヨー、清朝の名残の行政単位、次章で詳述する）で、漢民族に混じって、「大雑居、小聚居」¹の局面を形成している。これらの旗には、清朝期の名残である「旗・オボー」が存在する。そこが、古くからモンゴル民族の宗教信仰のシンボルである「オボー祭祀」の一種として信仰されてきた。

内モンゴルにおいて仏教は、中国の「土地改革」（1946年～1948年）²とすべての宗教と迷信が取り除かれた「文化大革命」（1966年～1976年）という二回の政治運動によって徹底的に破壊されたと言われている。そして、各旗の「旗・オボー祭祀」も、その政治の嵐に巻き込まれ、「文化大革命」の直前の1950代の末までに完全に中止された。そして文化大革命後の1980年代から復活し、1990年代の半ばから、本格的な復活の道を歩み始め、21世紀に入ってから興隆の段階に入った。近年は、「西部大開発戦略」³の波に乗り、内モンゴルの自然草原の生態破壊に伴う牧畜文化の衰退と担い手のモンゴル族が漢民族化されるなど社会の変化が顕著であることにも関わらず、「旗・オボー祭祀」は、各地で盛んに行われ、観光資源開発の目玉にもなっている。

近年の内モンゴルの「オボー祭祀」についての先行研究には、オボー祭祀の「伝統儀礼」⁴、「遊牧文化、遊牧共同体の繁栄、家畜の繁殖等を祈願する宗教的行事である」⁵などの視座からの研究論文はあるが、モンゴル歴史上の宗教活動の重要な一環とした伝統的な宗教儀礼である「旗・オボー祭祀」（または、旗・札薩克・オボー祭祀とも呼ぶ）についての研究報告はまだ見当たらない。そこで、筆者は、「旗・オボー祭祀」に焦点を置き、高度経済成長期に入った内モンゴルの「旗・オボー祭祀」の復活、変容、伝承と、その意義を社会変動のコンテキストの中で考察してみたい。

*比較文化学専攻

具体的に本論は実地研究資料、及び文献資料に基づき、清、中華民国及び中華人民共和初期と現在の内モンゴルの「旗・オボー祭祀」の歴史的な変遷を簡単に辿りながら、マクロ社会環境を背景にした内モンゴル・ウラーンチャヴ地方（烏蘭察布市）⁶の4旗の「旗・オボー祭祀」を事例にして明らかにしたい。

2 清朝行政制度の旗と旗・オボー祭祀の歴史的変遷

17世紀前半以来、モンゴル諸部の服属を受けた清朝は、モンゴルに自らの八旗制度の諸原則を適用した統治構造を作りだした。これがザサグ旗（jasayqosiyu 札薩克旗）の制度である。八旗とは異なるザサグ旗最大の特徴は、ザサグの存在である（岡 2007 P: 7）。ザサグ（jasaγ）即ち旗長である。旗はモンゴル語で「ホジョー（qosiyu）」と呼ぶ。清朝の支配民族、満州族の軍事的社会組織である八旗（中略）は、順治17年（1660）以後、組織名として「旗」という漢語訳が与えられるようになる（楠木 2009 P: 4）。ザサグ（jasaγ）即ち旗長である。「旗」はモンゴル語で「ホジョー（qosiyu）」と呼ぶ。この清朝のモンゴル支配の行政単位が中華民国にもそのまま存続し、今日の内モンゴルには、まだ、地方行政機関の一種として存在する。

オボーは、造営の目的によりいろいろな種類に分けられる。基本的に、天のオボー、氏族オボー、英雄オボー、記念オボー、行政オボー、寺院オボー……など実に種類が多い。「旗・オボー」は、行政オボーの一種であり、清朝期に成立したものである。清朝期にモンゴル各地の「オボー祭祀」は次第に、「旗・オボー祭祀」を重視するようになった（賽音吉日嘎拉 2008 P: 327）。1911年、辛亥革命によって清朝が崩壊し、1912年に中華民国が成立後も「旗・オボー祭祀」は行政主導の伝統的なモンゴル仏教独自の祭祀を行っていた。

3 清朝期のウラーンチャヴ地方の「旗・オボー」

「旗・オボー」は、「旗・札薩克・オボー」ともいう。それは、ザサグを始めとして、旗の全牧民の信仰、崇拝するオボーである。「中国解放以前」のウラーンチャヴ地方の「旗・オボー祭祀」に参加したことがある今年84歳（1926年生）のモンゴル民俗研究者のバインボ氏⁷は、1950年末までの祭祀の様子を、次のように話している。

「旗・オボー祭祀」は、行政と全旗の人々が共同で開催する。時々清朝廷からも参列し、ハレの日への応援の意を表す。祭祀の費用の大部分は、旗の財政及び有力者、金持ち、一般人が奉納の形式で賄う。伝統的に、一番いいと思われるものを、オボー山の一面を覆うように奉納する。例えば、上等な乳製品、上級の家畜の肉、酒、茶、絹布の飾り物など。祭祀は必ずラマ僧が仕切るが、そこで、祭祀の最初に、中国漢民族の軍神として祭る三国時代の蜀の武将・関羽を祭る儀式をする清朝の決まりがある。これは、清朝が漢民族の文化を大いに気に入り、モンゴル旗の男性も清朝の軍人であるため、戦闘での勝利を願って、漢民族の有名な軍神を支配下のモンゴル人にも祭ることを強要した。その後、モンゴル人の軍旗と天、地、龍、神々などを祭る。ラマ僧によるオボー祭りの読経が終わると、参加者全員が小石を拾い、オボーに置きながら時計回りで三周する。これが、オボー祭祀の最後の儀式である。その後、供物である羊の頭だけをオボーに残し、他の献祭品を近くの宴会の会場である寺に運び、祭祀に集まった全員が、奉納品、供物を賞味しながら、モンゴル男児の三競技である競馬、モンゴル相撲、弓術を觀賞する。競技の入賞者

には手厚い賞品を用意する。また、女性はオポー山に登れないため、遠い処から仏教式の拝礼をする。

以上のように、清朝、中華民国、解放初期の1959年まで、ウラーンチャヴ地方それぞれの旗に「旗・オポー」があり、モンゴル人の「年周儀礼」として祭祀をしていた。

現在ウラーンチャヴ地方には、牧畜業を営む4旗がある。その中の一つであるドゥルベド旗に居住するモンゴル族は、自分達がチンギス・カンの弟であるハサルの後裔——四子部落の子孫であるという。つまり、ドゥルベド旗におけるドゥルベド部落は、モンゴル帝国の黄金家族の出自である。また、チャハル前旗、チャハル中旗、チャハル後旗の3旗に居住しているチャハル人⁸は、モンゴル帝国時代に、チンギス・カンの部下として封じられた部族の一つであると言われている。

つまり、ウラーンチャヴ地方のドゥルベドとチャハル部族は、マイノリティーであるけれども、モンゴル帝国の名門部族の子孫であり、現在の内モンゴルのモンゴル文化の重要な一端を担っていると言える。

さらに、内モンゴルの中部に位置するウラーンチャヴ地方は、交通至便の上に、区都フフホトに近いので、そこに居住するモンゴル族は、改革開放後、内モンゴルの中で一番早い時期に、「旗・オポー祭祀」を復活させ、それを観光資源開発の目玉にした地方である。

そして本稿は、上の4旗の「旗・オポー祭祀」を事例にして紹介したい。その中で特に、ウラーンチャヴ地方の唯一牧畜を専門的に従事しているソム（郡）⁹を持つ、ドゥルベド旗の「旗・オポー祭祀」を詳しく取り上げて検討を進めたい。そこで、祭祀の具体的な様子、及び社会変動の状況に応じて変えていく形式とその内容を、歴史的視点から比較してみたい。

4 ウラーンチャヴ地方の四つの旗

ウラーンチャヴ地方は、総面積は5.5万km²。総人口は272万人。主体民族のモンゴル族は6.3万人で、総人口の2.3%を占める。漢民族は260.5万人で、総人口の95.4%を占め、満州、朝鮮など他の20あまりの少数民族が6万人ほど、総人口の2.2%を占める¹⁰。現在はウラーンチャヴ市と呼ばれ、農耕地の面積が内モンゴルで二番目（内蒙古自治区概況編写組 2009: p 20）の広さを持つ、区の下位地方行政であり、さらにより小さい11の旗、県等の行政単位で成り立つ。その総人口の2.3%を占めるモンゴル族牧民の主な居住地は、ドゥルベド旗、チャハル前旗、チャハル中旗、チャハル後旗の4旗である。他の5県、2市¹¹は漢民族中心であり、農業、工業を主に営み、多少の牧畜も行っている。

「旗」に次ぐ地方行政単位に、ソム（郡、モンゴル語）と鎮（中国語）、郷（シヤン、中国語）がある。これらは行政的に同じ地位にあるが、基本的に主な産業の営みと主要な居住民族により名づけたものである。ソムは、主に牧畜産業を営み、基本的にモンゴル族が、漢民族に混じって、「大雑居、小聚居」の局面を形成して居住する。鎮と郷は、主に農業中心の漢民族の居住地である。ソムに比較すると工業、商業も発達している。

5 ウラーンチャヴ・チャハル三旗（前・中・後）の旗・オポー祭祀の復活と変容

(1) チャハル前旗（察哈尔右翼前旗）の旗・オポー祭祀

ウラーンチャヴ地方の中南部に位置する。旗総人口は23.4万人を有し、その2%を占める¹²モンゴル族の殆どが旗行政中心地に居住し、4鎮、3郷の地方行政地区の中に、牧畜ソムはないが、バイントラ鎮には、168世帯、503名のモンゴル族が漢民族と混住している¹³。しかしこの数少ないモンゴル族の殆どが日常言語からライフスタイルまで漢民族と同様になっている。つまり漢化が顕著である。生業も主に農業、商業、工業が中心で、多少の放牧は存在するが、人口が圧倒的に多い漢民族によって営まれている。

チャハル前旗の「旗・オボー」は旗の行政中心地であるトグ・イン・オーラ鎮の西北約6kmに位置し、内モンゴルの交通の大動脈である集二鉄道と二広国道が横に通っている。

旗の共産党委員会の書記にモンゴル族が就任してから、モンゴル民族の伝統文化を重視し、観光開発、地域アピールのために、2009年からモンゴル宗教儀礼のシンボルであるチャハル前旗の「旗・オボー」を復活させた。旧暦5月13日にラマ僧の祭祀によって行われる「旗・オボー祭」は、2010年が二回目になる。また、「旗・オボー」復活の儀礼には、モンゴル人の崇拝するチベット仏教で有名な塔爾寺¹⁴のラマ僧よりオボーの加護経を授けてもらい盛大に行った。

チャハル前旗の「旗・オボー」の復活、祭祀は行政機関が先導して実現したと言える。しかし、この旗には、あまりにも多くのモンゴル文化が消え去ってしまったため、税金を使い、漢民族に馴染みのない祭礼を行うことに批判も多い。これに対し、行政は交通地理が優位である特徴を最大限に利用して、中国南部の発展した地方からの観光客をターゲットにした観光業の発展、地元のアピールをはかることが最大の目的であると主張している。その中で、数少ないモンゴル族は、自民族文化の復興動に積極的に参加している。筆者の聞き取り調査では、彼等の中で、「モンゴル族の党委員会の書記が離任したら、チャハル前旗の『旗・オボー祭祀』が中止になるかもしれないと心配する」と答える人もいた。

(2) チャハル中旗（察哈尔右翼中旗）の旗・オボー祭祀

ウラーンチャヴ地方の中西部に位置し、旗の総人口が21.9万人であり、総人口の1.4%を占めるモンゴル族が、主に、生業が牧畜であるクリエー・ソム（庫倫・ソム）と旗行政中心地の科布尔鎮に集中居住する。他の1ソム（ウラーン・ソム）、5鎮、3郷は農業、商業、工業が主な産業であり、この中のウラーン・ソムは名前と中身が違って、他の漢民族の農業郷と同様である。また、これらの地方の漢民族も多少牧畜を副産業として営む人がいる¹⁵。

チャハル中旗の「旗・オボー」はクリエー・ソム中心地の東北へ約11kmに位置する。通称ハイチーン・オボーである。元は堂地という所のノムガン・オボーを、チャハル中旗の「旗・オボー」として祭祀していたが、そこが農地に変わったため、現在の所に移動した。1973年から毎年旧暦5月13日に周辺の牧民の自由意志に基づき祭祀を行う。旗行政機関から時折奉納品が持ちこまれ、休暇を取る気分で参加する。このオボーを旗行政機関が「旗・オボー」として祭祀しなかった最大の理由は、旗行政中心地の科布尔鎮より南10kmの所に、内モンゴルでも有名な高原湿地の観光名所である「輝騰錫勒」があり、そのオボーを旗行政指導の元で、官民一体になって運営しているためである。そのオボーは交通至便、風光明媚な所にあり、観光オボーとして旗の「草原観光」の目玉になっている。

クリエー・ソムのハイチーン・オボー祭祀は、現在はその「旗・オボー祭祀」の機能を殆ど失

い、牧民のローカルな祭礼になっている。

(3) チャハル後旗（察哈尔右翼後旗）の旗・オボー祭祀

チャハル後旗はウラーンチャヴ地方の北部に位置し、人口は22.2万人を有し、殆どが漢民族で、モンゴル族は総人口の5.83%を占める¹⁶。生業が牧業、農業混合である2つのソムのウラーンハダとドローンホトグがある。この2つのソムにでも漢民族が人口の大半を占める。モンゴル族の殆どが、この2つのソムと旗行政中心地のバインツァーガン鎮に集居している。他の4鎮、1郷は漢民族を中心に農業、商業、工業と多少の牧業が営まれる。

チャハル後旗は、清朝と中華民国の時代に、正黄旗と正紅旗に分かれていたため、それぞれに「旗・オボー」があった。現在は、漢族の農耕地に囲まれている。元々そこに居住していたモンゴル族は北へ移動した。1980年から、ウラーンハダとドローンホトグの2ソムのモンゴル牧民らの自由意志で、それぞれのソムにあった氏族オボーを「旗・オボー」として祭祀するようになった。つまり、2基の「旗・オボー」が併存しているとも言える。この中でドローンホトグ・ソムの西南9kmにあるバジ・オボーは毎年旧暦5月7日に祭祀を行い、旗行政の責任者らが、奉納品を持って時折参加している。

チャハル後旗の「旗・オボー」は交通不便な場所にあるため、観光資源と地元アピールに利用することができない。また、この旗のモンゴル族の殆どが、牧業と無縁な地である旗行政中心地のバインツァーガン鎮に集居しているため、「旗・オボー」には無関心である。

6 ドゥルベド旗と「旗・オボー」祭祀の復活

ドゥルベド旗は、ウラーンチャヴ地方の西北に位置し、北はモンゴル国と接していて、内モンゴルの区都であるフフホトより北80kmにある。全旗の面積の86%が天然牧草地であるため、「牧畜と草原旅行」を主産業にしたウラーンチャヴ地方における唯一の牧畜を専業に従事している旗である。（烏蘭察布方土編纂委員会 2004 P:6）ドゥルベド旗の人口は21万人であるが、全人口の8.7%がモンゴル族が占める¹⁷。このような人口構成から、ドゥルベド旗の牧業の担い手にはモンゴル族以外に、大多数の人口を占める漢民族も参加し、漢民族による牧畜民を形成している。モンゴル族は主に、旗行政中心地——烏蘭華鎮と5つの、生業が牧畜であるツァーガンボラグ・ソム、ノムガン・ソム、ホンゴル・ソム、ジャンギーイン・ソムとバインチョクト・鎮（2006年まではソムだった）に居住している。他の4鎮、1牧場、2郷は漢民族中心に、農業、商業、工業が主な産業であり、多少の牧畜業をも営む。

ドゥルベド旗の中心地より北へ約70kmの所にあるバイエンフシヨ¹⁸・オボーは、「解放前」のドゥルベド旗の「旗・オボー」であり、通称「ドゥルベド王のバイン・オボー」と呼ばれる。現在は「バイン・オボー」という名称になっている。このオボーは、1980年に入って周辺牧民の自由意志で復活させた。また、それ以前の清朝時代の「旗・オボー」は、元々、現在漢民族が農業を営んでいる、平坦で地下水が豊富で土地が肥沃な処にあった。旗の南より農地開墾を始められ、それによって牧地が北へ移行するにつれて、「旗・オボー」も、地理的に北にある現在のバイエンフシヨの境界に移動したと、現地の長老から聞き取り調査で伺うことができた。

(1) 復活後の元「旗・オボー」としてのバイン・オボー祭祀¹⁹

「バイン・オボー」は、バイエンフシヨ集落より北へ約3キロの山頂にあり、石をもって三段の円筒形に積み上げた造営物である。下段の直径は6～7メートルぐらい。中央の上端は、ポプラの葉のついた枝で圍繞されている。上段の中心に、ダオゲジル（擬宝柱）と呼ばれる聖なる柱が立てられる。柱の先端は金色に塗られた擬宝珠を嵌めて、その直下に裳裾に似たシャンバが飾られる。シャンバの上に青、赤、黄、白、緑の五色の布を巻き付けたもの。これら五つの色には、すべて意味づけられている。青は、モンゴル民族のシンボルカラーであり、赤は、太陽と日のシンボルで、黄はラマ教、白は乳で、緑は草原を象徴する。また、このオボーを中心に大円形で囲むように、12基の小さいオボーが、2メートルほどの間隔で並んでいる。

行事過程は基本的に、前述の清朝期の「旗・オボー祭祀」と、ほぼ同様に行われる。異なる点は、ラマの数が清朝より少なく、祭祀後の宴会場が寺ではなく牧民の家になる。また、女性の参加が認められている点である。

1999年まで、時折ドルベト旗の行政機関の責任者らも奉納品をもって祭祀に参加した。また、周辺のモンゴル族、漢民族を含む何千もの人々が自らの意志で積極的に取り組み、地元行政の後押しもあって賑やかさが増したため、他の地域の人々や観光客も大勢に来るようになった。また、遠い所からの商店の出店も多い。

本来の旗・オボー祭祀は、行政機関が仕切り、各郡の行政及び全旗の牧民が一緒に取り組み、出費は個人の自由意志の奉納と行政の支援で賄う。それに比べ、復活後のバイン・オボー祭祀は、その時の行政機関の責任者の伝統文化と宗教行事に対する関心の有無により、当事者が参加するだけで、ドルベド旗行政側の経済的支援がない。要するに、バイン・オボーは、ドルベド旗の行政機関と全旗の人々の本格的な参加がなかったため、本来の「旗・オボー祭祀」の機能を果たしていないと言える。

(2) 民間観光開発業者による旗・オボー復活活動

ドルベト旗の経済を牽引してきたと言われている地元の「ゲゲンタラ・草原旅行株式会社」（以下ゲゲンタラ観光地）が、1996年よりドルベト旗の共産党委員会と政府の支持を受け、旗・オボーの祭祀を復活し始め、旗の中心地より北東32km離れた処にある観光地のゲゲン・ツァガン・オボーを基盤にして、ドルベド・旗・オボーとして復活させた。昔の「旗・ザサグ・オボー」の造営の段取りとして、ドルベド旗の各郡のオボーから石を一個ずつ取り集めて、ラマ僧と長老による伝統的なオボー造営の仕来りや慣行に沿って行った。

このように、観光会社側のマネジメントで、ゲゲン・ツァガン・オボーの規模を大きくし、2000年からドルベド旗の「旗・オボー」として、旗の党委員会、政府を始め、全旗の4個ソム（郡）、2シャン（郷）、5鎮と1牧場のすべてで行政機関が献祭し、大勢の観光客と周辺の牧民らが参観する「オボー祭祀」になり、定期的に盛大に行われてきた。交通が至便の上に、近くに観光会社のレジャー施設があり、同時に3000人が会食し、1000人が宿泊が可能になった。

(3) ゲゲンタラ観光地におけるドルベド旗の旗・オボー祭祀の現況

オボーは観光地のレジャー施設より西南3km離れた丘の真ん中に、石、樹木などを三段円錐

型に積み上げて造営され、大オボーと呼ばれている。面積が10㎡、高さが6mである。最上段の三段目の中心に、木製の柱が立てられる。その先端に金色の炎風の三叉矛が嵌められている。この中心祭壇の大オボーを、大円形に囲むように、約11mの間隔で小さいオボが12基並んでいる。大オボーと小オボーの距離は13mある。それら小オボーの中央にも細長い金箔で塗った炎風の三叉矛が聳えている。合計13基のオボーは、積み石の殆どが白い石である。大オボーの中心柱から周辺の小さいオボーの柱まで、長さが約17mのジャル・ヒーモリと呼ぶ縄が張り結ばれている。その上には七色の三角の絹片が垂れ下げられている。大オボーのボディーに、ハダグである五色の絹が奉納されて、この五色は「五天神色」と意味付けられている。2005年から、ラマ僧とボー（モンゴルシャーマン）が共同で祭司を勤めるようになった。

筆者が現地調査を行った2010年のオボー祭祀の現況は以下の通りである。

6月24日（旧暦5月13日）。この年の祭祀の担当者²⁰はホンゴル・ソムの人民政府、フジルト・シャンの人民政府とゲゲンタラ・草原旅行株式会社の三者であり、祭祀の主な経費を支出する。また、他の全旗の地方行政機関及び旗中心地における政府行政機関らすべてが招待されて、金銭や供物を奉納する。奉納金は入り口の受付で奉納者の名前と金額を書いて納める。供物はオボーの前にある祭壇に献じる。

参拝者は1500人ほど集まり、彼等は、オボー祭祀ツアーの観光客を中心に、各政府行政機関の関係者、周辺の牧民、農民らである。

祭祀は朝9時45分から始まり約3時間続いた。祭祀の開始は、一人の専門の男性司会者がモンゴル語、中国語でオボー祭祀の歴史、意義、及び担当者、参加者を紹介することから始まった。同時に祭壇の西南に机、椅子を設置して、モンゴル国から招聘した有名なモンゴル・ボー（シャーマン）が祈りの言葉を捧げる。モンゴル・ボーの後方に座している地元寺院のシャラムリン寺のラマ僧らもオボー祭祀の読経をする。彼等は祭祀全体の終了まで唱え続けた。シャーマンは、天地、地方の神々、祖先霊、守護霊の「オンゴット」²¹に祈りを捧げ、祖先のシャーマンの加護を祈る。ラマ僧は主に天に捧げる雨乞いと疫病災害がなく安楽、豊饒となるようお経を唱える。

行事の詳細な進行は次のとおりである。

- ① 30代の男性がオボーを背にして、東の空に向かって弓を射る。
- ② ホンゴル・ソムの女性ソム長が担当行政を代表して歓迎の言葉を述べた。ドゥルベド旗の党委員会の書記（旗の最高責任者）から祭壇の前にある火鉢の聖化を点火した。
- ③ 供物を献じる。供物は、2頭の羊の丸焼き、4頭の湯で羊の肉と酒、乳製品などである。
- ④ 旗のモンゴル族の約50名の中学生が「モンゴル人の祖先であるチンギス・カンの賛詩」を朗読する。この頃、オボーから少し離れた場所でモンゴル相撲、競馬が始まり、オボーの祭礼が終わる頃に終了した。
- ⑤ 一人の男性ボー（シャーマン）、二人の女性エトウゲン（シャーマン）が順次にモンゴルボー教の神舞を舞う。
- ⑥ 黄色い絹に書いたモンゴル語の天への祈りの詩を朗読後、それを火鉢で燃やした。
- ⑦ 白い馬を天に捧げる儀式を行い、馬がオボーを廻る。
- ⑧ 参加者の全員が小石を拾い、大オボーに置きながら時計回りで三周する。オボー祭壇とモンゴルシャーマンに、奉納金を捧げる漢民族の観光客が目立った。

⑨ 最後に、参加者らが、観光地中心地のレジャーセンターに戻り宴会を行った。



写真1. 1983年の祭祀当日の「ドゥルベド旗・オボー」(バイン・オボー) 大塚和義²²より



写真2. 2010年の「ゲンゲンタラ観光地」におけるドゥルベド旗の旗・オボー祭祀 (筆者撮影)

7 考察——内モンゴルにおける旗・オボー祭祀の復活、変容と意義

(1) 清朝、中華民国時代の「旗・オボー祭祀」の特徴は以下の7点にまとめられる。

- ① 旗長である行政が運営して、全旗の牧民が参加する。
- ② 祭祀はラマ僧が司る。
- ③ 祭祀の最初に、漢民族の軍神を祭る。その後、モンゴルの伝統的な祭祀を行う。
- ④ 祭祀の費用は、旗ザサグが主に出費するが、有力者と富有者、また、一般人も惜しまず、自由意志により奉納する。
- ⑤ 祭祀後、モンゴルの伝統的な、男児の三競技を行い、宴会で締めくくる。
- ⑥ 女性はオボー山に登れない。
- ⑦ 祭祀の目的は、天、地、神々などを信仰し祭る宗教信仰である。

清朝、中華民国の支配下の「旗・オボー祭祀」は、宗教儀礼として、地域統合をする役割を果たしていた。さらに、モンゴル人の世界観と価値観がオボー祭祀に反映されている。

(2) 現代の中華人民共和国・ウランチャヴ地方の旗・オボー祭祀特徴は以下の7点にまとめられる

- ① 農地拡大により「旗・オボー」が本来の場所を離れて北へと移動された。
- ② 「旗・オボー祭祀」の復活、復興も、主に社会経済の発展の先導によって引き起こされたため、その復興の道のりが、内モンゴルの経済発展を見ながら、一步遅れて歩んできた。ある意味では、経済発展のお陰とも言える。例えば、1983年に、ドゥルベド旗の「バイエンフショの生産大隊では、今年の干魘がひどく、雨が降ってください。草が長くのびてください。家畜はみんな肥えるように——」と祈願するため、オボ祭祀の開催を牧民たち関係機関に要望した結果、実現したものだ²³。
- ③ ドゥルベド旗の「旗・オボー祭祀」が観光化により大いに賑わっている。それが、伝統宗教「儀礼」を「見せ物」として開催されていると思われがちである。しかし伝統的な牧畜文化が多少残っていて、また、チンギス・カンの「黄金家族」の筋骨を引くドゥルベド・モンゴル部族の居住地であるため、「旗・オボー祭祀」に、モンゴル族の伝統的な宗教イデオロギーと民族アイデンティティの強調が反映されていると考えられる。特にモンゴル国の有名なシャーマンを誘って、オボ祭祀の主役を務めることは、モンゴル固有宗教への回帰と伝統文化の創造に取り組んでいると考えられる。なぜなら、仏教がモンゴル高原を制覇する前には、モンゴル人のコスモロジーを反映するオボ祭祀は、モンゴル固有の宗教であるボー教（黒教）²⁴のシャーマン（ボー）を中心して行っていた²⁵からである。つまり、ドゥルベド旗の観光地の「旗・オボー祭祀」は、「祭儀」と「祭礼（祝祭とも）」としての相乗効果を生み出していると考えられる。しかし、ドゥルベド旗の観光地の旗・オボ祭祀に、全旗の牧民が積極的に参加しているとも言えないのが現状である。逆に、「バイン・オボー」を「旗・オボー」として祀る人も多い。
- ④ チャハル前旗はモンゴル族の漢化が著しく、牧畜ソムもないが、観光業を發展する有利な地理条件を利用して、「旗・オボー祭祀」を復活させた。しかし、人口が圧倒的に多い漢民族に取って、オボ祭祀は馴染めず、税金の無駄遣いという声も出ている。
- ⑤ 旗・オボ祭祀の開催が、行政責任者のモンゴル民族の伝統文化、宗教信仰を重視するかどうかということと、経済利益に結び付くかどうかということに直接な関係ある。例えば、チャハル中旗、後旗は、「旗・オボー祭祀」の復活が行政の支援が少なく、観光業にも利用できていないため、モンゴル牧民らは自由意志に基づき、祭司を行っている。つまり、ローカルな「祭儀」になっている。チャハル前旗は、モンゴル族の党委員会の書記が就任後、観光化、地元アピールのメリットがある場所に、「旗・オボー」を改めて造営し、旗行政のリードで盛大に祭祀が行われている。
- ⑥ できるだけ仏教特徴の旗・オボ祭祀を行うことが、チャハルの3つの旗、ドゥルベド旗の「バイン・オボー」らの共通点とも言える。
- ⑦ モンゴル族の牧畜民は、「旗・オボー祭祀」はあくまでも、祖先から代々伝わってきた天・地・神々を祭る儀礼として積極的に参加してきたことが筆者の聞き取り調査で分かった。

(3) 清朝、中華民国時代と中華人民共和国時代の旗・オボー祭祀の比較研究

前述のように、ウランチャヴ地方における「旗・オボー祭祀」を、清朝、中華民国時代と中華人民共和国時代の様子を述べた。両者を比較してみると次のようになる。

- ① 最大の違いは、前者には、女性が参加できないが、後者には、女性が参加できる。それは、女性の地位が著しく高まり、人々の宗教的信仰心が弱まったという時代の流れが背景にあると考えられる。
- ② いつの時代でも、漢族住民はオボー祭祀の時に、主にその商業活動に積極的に参加している。
- ③ 「旗・オボー祭祀」が、清朝と中華民国時代には「祭儀」として機能していた。中華人民共和国に入り、中止、復活の過程を経て、現在は二種類である「祭礼」と「祭儀」に枝分かれていく傾向がみられる。その最大の原因は、中国の特殊な社会構造である社会主義市場経済というコンテクストを背景に、復活、興隆を果たしているからと考えられる。
- ④ ウランチャヴ地方の「旗・オボー」の祭祀日は、モンゴル人の吉日と言われる旧暦5月13日が圧倒的に多い。

以上の比較分析を纏めると、内モンゴルにおける「旗・オボー祭祀」は、清朝、中華民国、中華人民共和国の3つの時代を潜り抜き、それぞれの社会情勢、国家システムの変容に翻弄されながらも、時代の状況に応じて、祭祀の形と内容を変容しながら、今日まで生き残ってきたことを分かる。

まとめ

内モンゴルと言えば「草原」、「遊牧民」などのイメージが浮かぶかもしれないが、実は「内モンゴルは中国の13の食料主産省の一つである」（内蒙古自治区概況編写組2009: p 229）。従って、食料生産のための農耕地の拡大、砂漠化や過剰放牧による自然草原の激減が原因で、モンゴル遊牧民も定住化してきて、現在、真の意味での遊牧民はもう数えるほどしかない。そのため、今の内モンゴルには伝統的な遊牧文化が絶滅に瀕していると言える。

また、全区の人口のほぼ80%を占める漢民族の殆どが定住民であり、「旗・オボー祭祀」の担い手であるモンゴル族の文化変動、例えば、外来文化との接触、取り入れと情報化による意識、生活様式も大きく変わってきた。特に、「文化大革命」の十年間の伝統文化、民族儀礼信仰の徹底的破壊によって、「新中国に生まれた」モンゴル族自身でさえ、自民族の伝統文化、民俗儀礼信仰について十分理解できなくなってきた。つまり、内モンゴルでは、今、「モンゴル民族の伝統文化、民俗儀礼信仰」のベースになる遊牧産業と社会形態の大きな変動が起きている。

しかし、中国の経済発展に伴い、人々は物質的に豊かになるにつれて、精神的安息をも宗教儀礼に求める傾向が顕著に現れてきた。例えば、モンゴル族の家庭には、祭壇を設ける習慣が次第に復活している。コミュニティには「オボー祭祀」が盛んに行われるようになってきた。

伝統的な「旗・オボー祭祀」も、時代に応じて形と内容を変えながら「祭礼」と「祭儀」の二種類に枝分かれて、変化しつつ維持されている。「旗・オボー祭祀」の最大の意義は、近年の内モンゴルの自然草原の生態破壊に伴い牧畜文化の衰退と担い手のモンゴル族が同化されるなど社会形態の変化が顕著であることにも関わらず、中国社会主義市場経済を背景に、観光とローカ

ルな二種類の「旗・オボの祭祀」が盛んに行われている点である。また、一部観光資源化された旗・オボ祭祀の担い手たちの、宗教的価値観への志向をも軽視できない。さらに、内モンゴルのマイノリティであるモンゴル族の民族アイデンティティの強調、人間性の回復と民族文化、宗教信仰の復活、再生といった展開を見せている。

「旗・オボ祭祀」について研究は、まだまだ解明すべき多くの課題が残っているが、筆者は、内モンゴルの多数派である漢民族と他の少数民族らの、「旗・オボ祭祀」への参与動機、見解及び、それによって起きる異文化同士の融合と対立状況などを今後の研究課題にしたい。

注

- 1 「大雑居、小聚居」とは、広い範囲からみればモンゴル人と漢民族とは混住しているが、狭い範囲からみるとモンゴル人は周囲の漢民族から独立して、集中的に居住しているというものである。(阿拉騰 2002) P458
- 2 中国共産党の指導のもとに、地主の土地と生産手段を没収し、土地を所有しない、またはわずかしか持たない農民に分け与えた土地所有制の改革。略して“土改”。——『中日辞典』第二版1992、2003 小学館・北京商務印書館 電子辞書。
- 3 第十次五ヵ年計画期(二〇〇一～〇五)で「西部大開発」が本格化する。『現代中国を知るための55章』高井清司編 明石書店 2000年7月25日 P83、84
- 4 「オボ祭り」と牧畜」大塚和義(1984)
- 5 「オボの造営に関する基礎的諸考察：ウジムチン地域の事例を中心に」(オルトナスト ボルジギン2005)
- 6 内モンゴル自治区の下位行政単位。
- 7 現烏蘭察布市察右後旗在住、『察右後旗文史資料』2003版内部資料の編纂者の一人。オボ祭祀の研究者、教育者。
- 8 モンゴル帝国時代に、チンギス・カンの「黄金家族」の宮廷を管理する人々を、後にチャハル部落と呼ぶ。現在はその殆どが内モンゴルのシリングル盟、ウラーンチャヴ地方に居住している(シャグダラ・ソンデエ2007年)。内モンゴルのチャハル部族は、現在、その殆どがウラーンチャヴ地方とシリングル地方に跨って分布している。ウラーンチャヴ地方のほうを右翼チャハルと呼び、シリングル地方のほうを左翼チャハルと呼ぶ。
- 9 旗に次ぐ地方行政、主に牧畜産業を営み、モンゴル族と漢民族が混合居住している処をソム(郡)という。
- 10 2010年6月28日の烏蘭察布統計局でのインタビュー。
- 11 5県、2市とは、商都県、化徳県、卓資県、涼城県、興和県の5県、豊鎮市、ウラーンチャヴ市(集寧区)の2市。
- 12 <http://www.cyqq.gov.cn/channel/cyqq/col2383f.html> 察右後前旗人民政府ホームページ 2010/09/19参照。
- 13 察右後前旗統計局の2009年末の統計。筆者の直接インタビュー。
- 14 チベット高原の青海省にある古刹。
- 15 2010年6月第三週に行った現地調査。具体数字は察右中旗統計局が提供。

- 16 2009年の察右後旗統計局の統計。筆者の2010年6月25日に行った聞き取り調査。
- 17 2009年末の統計である。筆者の2010年6月に、ドゥルベト旗統計局への聞き取り調査。
- 18 当時ドゥルベト旗・ウランハダソム（郡）・第一生産大隊における牧畜集落。現在はバイン
チョクト・鎮の管轄下になる。
- 19 1983年ドゥルベト旗のバイエンフシヨに訪れた大塚和義は「オボ祭祀と牧畜」にてオボー祭
祀を記した具体的な様子と近年の様子を、筆者の現地調査で補足して要約した。出典注5同
様 p21
- 20 毎年、観光会社と2つの地方政府が担当する。2つの地方政府は、自由意志により担当
に名乗り出るが、基本的に全旗の12地方政府が順番に担当する。
- 21 ここでは、シャーマンの演出を通じて顕現する神々、祖先霊、守護霊を指す。モンゴルシャ
ーマニズム（黒教）は偶像崇拜を行う。それらの偶像を「オンゴット」ともいう。
- 22 出典注4同様
- 23 同上 p22
- 24 例えば、ブリヤード・モンゴル人のドルジュ・バンザロフが、1846年に発表した「黒教或い
は蒙古人に於けるシャーマン教」の中に、モンゴル人のコスモロジーを反映したオボー祭祀
の造営と祭祀は、伝統的にモンゴル固有宗教であるボー教（黒教）のシャーマン（ボー）を
中心となって行っていたことを記している。この論文は1846年、「カザン帝国大学学事録第
三巻」に掲載され、それを1942年（昭和17年）に、白鳥庫吉博士が、「北亜細亜学報」第一
輯に日本語に訳した。「古代の蒙古民族及び隣接諸民族の民間宗教は、欧州に於いてはシャ
マニズ Shamanism と称せられるが、これを信仰する者の間では特別な名称を有しない。蒙
古人は仏教を摂取した後は、これを黒教（*χ ara _ajin*）と名付けた。」バンザロフ（1864）
P 5
- 25 同上 p23～27

参考文献日本語（五十音順）

- 阿拉騰（2002）『東北アジア諸民族の文化動態』 煎本孝「編著」北海道大学図書刊行会
- 大塚和義（1984）「中国・内モンゴル自治区モンゴル族のオボ祭り」と「オボ」として」 23号
新日本教育図書株式会社 p1～25
- 岡洋樹（2007）『清朝モンゴル盟旗制度の研究』 東方書店
- オルトナスト・ボルジギン（2005）「オボー造営に関する基礎的諸考察」『千葉大学社会文化科学
研究』11号 p61-80
- 楠木賢道（2009）『清初対モンゴル政策史の研究』 石坂勲志
- バンザロフ（1864）『シャーマニズムの研究』（復刻版）バンザロフ ミハイロフスキー 著
白鳥庫吉 高橋勝之 訳 1971年 新時代社
- 遊川和郎（2000）『現代中国を知るための55章』 高井清司編 明石書店

中国語

- 烏蘭察布方土編纂委員会（2004）『烏蘭察布方土』 内モンゴル文化出版社

賽音吉日嘎拉（2008）『蒙古族祭祀』 内蒙古大学出版社

当代 総企画（2006）『藏金聚銀 de 草原——格根塔拉游牧文化旅游業十周年』 格根塔拉草原旅行中心 発行 p 24～25

内蒙古自治区概況編写組 内蒙古自治区概況編写組修訂本編写組（2009）『内蒙古自治区概況』 民族出版社

モンゴル語文献

賽音吉日嘎拉（1996）『蒙古民俗百科事典』文化卷 布林特古斯 主編 内モンゴル科学技術出版社

シャグダラ・ソンドェ（2007）『蘇尼特部族について研究』 内蒙古人民出版社 p93～103

A Study On Traditional Obo rituals of Mongolian in Inner Mongolia

— Revival and transformation of "Obo festa" in the [ura-nchavu] Provinces —

Arbutann Dagola

Most of the Mongolian of Inner Mongolia lives in “Hosho” [that is the remaining influences of Ching dynasty]. there is 52 Hosho in Inner Mongolia. Obo rituals in each Hosho has an altar that is the symbol of Mongolian ethnic religious.

Obo Festa in Inner Mongolia, was rolled in a political storm that removed the superstition and the religion, and discontinued completely by the end of 1950's. It was restored after “Cultural Revolution” in 1980's. It began to make a real comeback trail at the middle of the 1990's, and was flourished finally at the beginning of 21st century finally.

Obo in Inner Mongolia survived three periods of Ching, the Republic of China, and the People's Republic of China. It was developed into two directions; a commercial feature and a traditional ritual. During the period of the hundreds of yeans, it is changing shapes and the contents according to the transformation of each social environment and a national system. In addition, it shows the recovery of the ethnic identity of Mongolian in Inner Mongolia, the human nature, the ethnic cultures, and the religious faiths in Inner Mongolia. I researched four Obo festa in the [ura-nchavu] provinces ([karasuransannuno] city) in Inner Mongolia.